様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　４ 月 １７ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４３５７

研究課題名（和文）学校教育場面における自律性支援の実践的応用に関する研究

研究課題名（英文）A study on practical application of autonomy support in school settings

研究代表者
岡田　涼（Okada, Ryo）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０５８１８１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，教師の自律性支援的な指導行動を習得するための教授プログラムを開発することを目的とした。その目的のもとに4つの研究を行った。1つ目に，メタ分析によって教師の自律性支援の効果を数量的に明らかにした。2つ目に，質問紙調査によって教師の自律性支援の有効性認知の特徴を明らかにした。3つ目に，小学校の授業観察から，自律性支援的な指導の特徴を明らかにした。4つ目に，自律性支援的な指導行動を習得し，実践のふり返りを促すための教授プログラムを開発した。また，一連の研究知見をまとめたリーフレットを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自律性支援の概念は，教育実践を志向するものであったものの，必ずしも日本の学校教育場面への応用可能性については検討されてこなかった。本研究では，自律性支援の学術的知見を整理し，概念の精緻化・具体化を行うことで，学術的な発展とともに研究知見の実践的応用を目指した。本研究で作成し研修プログラムとリーフレットは，自律性支援に関する研究知見を学校現場に伝えるためのツールになるものといえる。特に，現在の学校教育場面における「学習者の自律性や主体的な学びを支える」という喫緊の課題に資する研究知見である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a educational program to acquire autonomy supportive teaching for teachers. First, the effects of teachers' autonomy support on motivation and academic grade was revealed. Second, questionnaire surveys revealed the teachers' perceived utility of autonomy support. Third, examples of autonomy supportive instructional behaviors were collected. Forth, a program to acquire autonomy supportive teaching and to reflect educational practices for teachers was developed. Finally, a leaflet that explain the findings of autonomy support was created.

研究分野：教育心理学

キーワード：自律性支援　授業における指導　自己決定理論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在の学校教育場面では，児童・生徒に対する指導や支援のあり方についての見直しが迫られている。世界的な動向において，キー・コンピテンシーの考え方に代表されるような汎用的な資質・能力の重要性が指摘され，その中には自律的に行動する力が位置づけられている。そういった動向のもと，新学習指導要領においては，アクティブ・ラーニングとして主体的・対話的で深い学びを成立される授業が求められた。教育現場では，こういった資質・能力の育成に関する対応が喫緊の課題となっており，その解決方策が模索されている。

教育心理学においては，学習者の自律性や主体的な学びという問題に関して，動機づけに関する研究が行われてきた。特に，学習成果につながる動機づけをいかに促すかが検討されてきた。そのなかで，教師の自律性支援に関する研究知見が蓄積されている。自律性支援は，児童・生徒の視点に立ち，選択を促そうとする指導態度であり，児童・生徒の自律的な動機づけを促し，さまざまな学習成果につながることが明らかにされている（岡田，2014; Vallerand et al., 1997; Reeve, 2016）。そうした知見をもとに，海外では自律性支援的な指導行動を教授するプログラムが開発され，その効果が検討されている（Su & Reeve, 2011）。

しかし，日本の学校教育現場には，自律性支援に関する研究成果が十分に伝えられておらず，自律性支援的な指導のあり方を効率的，系統的に習得するための機会はない。児童・生徒の自律性や主体的な学びを支える指導が求められている現状と，教育心理学で自律性支援の効果に関する実証的な知見が蓄積されてきたことを鑑みれば，両者の橋渡しとなる実証的かつ実践的な研究が不可欠である。特に，自律性支援の研究知見を教育現場に即したかたちで伝え，教師の自律性支援的な指導行動を促すための教授プログラムが強く求められている。

２．研究の目的

本研究では，教師の自律性支援的な指導行動を習得するための教授プログラムを開発することを目的とした。まず，①自律性支援に関する研究知見を系統的に収集し，その効果を数量的な点から整理した。次に，②自律性支援の有効性認知の概念を提起し，その特徴を明らかにした。そして，③自律性支援が実際の授業場面でどのような指導行動や授業展開として現れるかを明らかにした。以上の知見をもとに，④自律性支援的な指導行動を習得するための教授プログラムを開発し，その効果を検証した。これらを通して「学習者の自律性や主体的な学びを支える」という学校教育の課題に資する知見を得ることを目指した。

３．研究の方法

上述の目的に鑑み，3 年間に以下の 4 つの研究を行った。

(1) 研究 1：教師の自律性支援の効果に関するメタ分析

自律性支援の効果を示した国内外の研究知見を収集し，メタ分析を用いて統合し，動機づけや学業成績，学校適応などの指標ごとに効果量を推定した。オンラインデータベース ERIC を用いて，1987 年から 2017 年までの文献を検索した。小中高の児童・生徒に対する調査研究を分析対象とし，児童・生徒が認知する教師の自律性支援に焦点をあてた。作成した適格性基準をもとに，合計 60 研究を収集した。収集した研究から得られた効果量に対して，Borensteian et al.(2009) の方法を用いて母効果量を推定した。

(2) 研究 2：教師の自律性支援の有効性認知に関する調査研究

教師が自律性支援に相当する指導行動の効果をどのように捉えているか（自律性支援の有効性認知）を明らかにした。現職教員を対象に調査を行い，回答に不備のあるデータ等を省いて 218 名（男性 72 名，女性 113 名，未記入 33 名）を分析対象とした。先行研究（Deci & Ryan, 1987; Reeve, 2016）をもとに作成した「自律性支援―統制の有効性認知尺度」と，「教師効力感尺度」（前原，1994）を実施した。また，比較のために，教員養成課程の学生 110 名（男性 48 名，女性 62 名）にも調査を実施した。

(3) 研究 3：授業場面における自律性支援に関する観察研究

授業場面において，自律性支援に相当する具体的な指導行動を明らかにするために，小学校の授業を観察した。教科（理科，算数）の授業を 7 つと，縦割り学級での話し合い場面を 6 つ観察した。映像と音声データをもとに，授業中の教師の発話プロトコルを作成し，自律性支援の概念（Reeve, 2016）に即したカテゴリを用いてコーディングを行った。

(4) 研究 4：自律性支援的な指導行動を習得するためのプログラムの開発

現職教員を対象に，自律支援的な指導行動を獲得するためのプログラムを開発した。プログラムでは，①自律性支援に関する知見の提供，②自身の指導行動の振り返り，③自律性支援的な指導の具体の検討，という要素を盛り込んだ。3 回のプログラムを実施し，合計 68 名の小中高教員が参加した。プログラムの流れは，①主旨説明，②講義 1（自律性支援の概念の導入），③グループワーク（自律性支援に沿った実践例の振り返り），④講義 2（自律性支援に対する教員の意識と環境要因の重要性の提案），⑤まとめと振り返り（要点の確認と評価アンケートの回答）という構成であった。

４．研究成果

（1）研究１の成果

メタ分析の結果，自律性支援は学業達成と弱い正の相関を示した（ρ=.16，95%CI[.11，.21]）。動機づけについては，非動機づけ（ρ=−.32，95%CI[−.39，−.24]），外的調整（ρ=−.19，95%CI[−.29，−.08]）と負の相関を示し，取り入れ的調整（ρ=.15，95%CI[.09，.21]），同一化的調整（ρ=.41，95%CI[.37，.45]），内発的動機づけ（ρ=.44，95%CI[.40，.48]）と正の相関を示した。また，動機づけの自律性を示す RAI とは正の相関を示した（ρ=.32，95%CI[.25，.38]）。エンゲージメントとは正の相関を示した（ρ=.37，95%CI[.31，.43]）。ウェルビーイングとは正の相関を示した（ρ=.31，95%CI[.25，.37]）。心理的欲求の充足については，自律性欲求の充足（ρ=.47，95%CI[.37，.56]），有能感欲求の充足（ρ=.31，95%CI[.25，.37]），関係性欲求の充足（ρ=.38，95%CI[.32，.44]）と正の相関を示した。

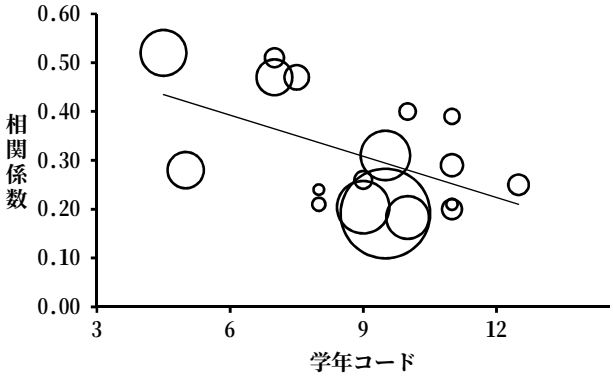

図１　自律性支援と RAI の相関係数のバブルプロット

また，学年の効果をメタ回帰分析によって調べた。その結果，自律性支援と RAI（B=−.04，95%CI[−.06，−.01]）およびエンゲージメント（B=−.05，95%CI[−.08，−.03]）との相関について，学年が有意な負の効果を示した。自律性支援と RAI との関連についての結果を図 1 に示す。

研究１で明らかになった点は，①教師の自律性支援は，弱いながらも学業成績の高さと関連する，②教師の自律性支援は，児童・生徒の自律的な動機づけの高さと関連する，③自律性支援の動機づけに対する効果は，学年が低いほど大きい，④教師の自律性支援は，ウェルビーイングの高さと関連する，である。この知見は，自律性支援の有効性を伝える際の実証的基盤となるものであり，本研究で作成するプログラムの学習内容の素材となるものである。

（2）研究２の成果

自律性支援―統制の有効性認知尺度に対して因子分析を行ったところ，「自律性支援の有効性認知」と「統制の有効性認知」に相当する 2 因子が抽出された。因子分析をもとに下位尺度を構成し，分散分析によって学校種間の比較を行った。その結果，自律性支援の有効性認知について，有意な差がみられた（F(2,215)=9.01，p<.001，η^2=0.08）。多重比較の結果，小学校教員が高校教員よりも有意に高かった（d=0.74）。また，中学校教員が高校教員よりも有意に高い傾向がみられた（d=0.41）。統制の有効性認知についても有意な差がみられたが（F(2,215)=3.53，p<.05，η^2=0.03），多重比較では有意な差がみられなかった。

階層的重回帰分析によって，自律性支援の有効性認知に対する学校種と教職経験年数の効果を調べた。その結果，学校種と教職経験年数の交互作用が有意であった（B=0.16，p<.001）。高校教員においてのみ，教職経験年数が有意な正の値を示した（B=0.13，p<.01：図 2）。

また，現職教員と学生の回答を項目ごとに比較した。その結果，自律性支援の有効性認知については，「4. 授業の内容や課題について，なぜそれを学ぶのかを児童や生徒に説明する」「10. 授業中に，自分で決めたり，選んだりする機会を児童や生徒にもたせる」などの項目で，現職教員の方が有意に高かった。一方，「7. 自分で説明するよりも，児童や生徒に考えさせる」では，学生の方が有意に高かった。

研究２では，現職教員の意識を測定するツールとして，自律性支援―統制の有効性認知尺度を作成し，そこから①自律性支援の有効性認知は，学校種や教職歴によって異なる部分がある，②現職教員は教職課程の学生に比べて自律性支援の有効性認知が高い，ということが明らかにされた。この知見は，本研究で作成するプログラムの構成を考えるうえで重要な視点をもたらすものである。

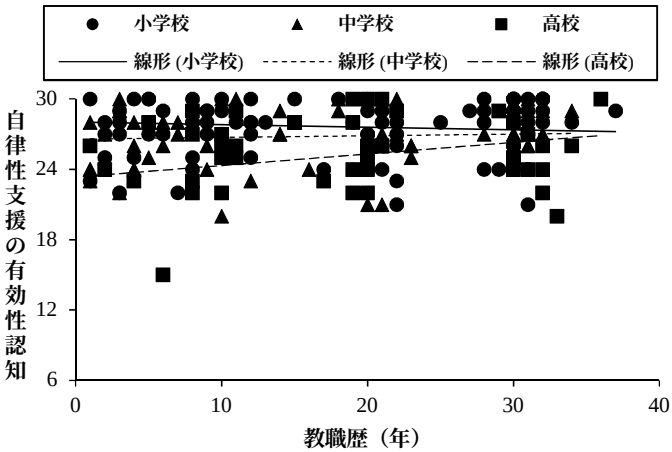

図２　教職経験年数と自律性支援の有効性認知

（3）研究３の成果

教科の授業においては，【視点の代弁】【興味の喚起】【挑戦の喚起】【聞き合いの促し】【意味の説明】【がんばりや否定的な気持ち

の受容】【選択の受容】【その他】の 8 カテゴリを設定した。全教師に共通して，【視点の代弁】（全発話の 4.36～17.73%）と【挑戦の喚起】（全発話の 5.62～20.47%）が比較的多くみられた。自律性支援の側面のなかでも，特に児童の視点に立ち，挑戦を喚起して有能感をもたせる支援が重視されていると推察される。一方，【聞き合いの促し】【意味の説明】【選択の受容】に相当する発話は少なかった。

縦割り学級での話し合い場面では【児童の視点の代弁】【興味の喚起】【がんばりの受容】【聞き合いの促し】【理由説明の促し】【その他】の 6 カテゴリを設定した。そのなかで，共通して【児童の視点の代弁】（全発話の 9.91～20.45%）と【興味の喚起】（全発話の 7.95～27.91%）が多かった。童の興味を喚起して動機づけを促しつつ，お互いの関係を調整するために児童の意見を代弁することが，異学年集団での指導における基本姿勢になっていると考えられる。

研究 3 では，自律性支援に相当する指導行動を教師の発話のレベルで収集できた。そこから，①教科においても児童の視点を代弁し，興味や挑戦を喚起することが多く行われている，②自律性支援的な指導の特徴は個々の教師によって異なる部分がある，ということが明らかにされた。この知見は，本研究で作成するプログラムにおいて指導行動の具体例として素材の一つになるものである。

（4）研究 4 の成果

プログラムに対する評価として，13 項目への回答を求めた（1：あてはまらない～4：あてはまる）。その結果，「これまでの児童・生徒とのかかわり方をふり返ることできた」（*Mean*=3.79, *SD*=0.40），「自律性支援の考え方は，児童・生徒とのかかわり方を考えるうえで有効だと思った」（*Mean*=3.76，*SD*=0.42），「自律性支援を意識しながら，児童・生徒にかかわろうと思った」（*Mean*=3.78，*SD*=0.41）等で高い評価が得られた。

また，プログラムを補助するツールとして，一連の研究知見をまとめたリーフレットを作成した。リーフレットには，①自律性支援の概念，②自律性支援の効果に関する知見，③自律性支援の具体例，④自律性支援に対する教員の意識，⑤自律性支援的な指導を行うための環境，などを掲載した（図 3）。

研究 4 では，自律性支援に関する実証的知見にもとづくプログラムを作成することができた。このプログラムは，自律性支援に関する研究知見を学校現場に伝え，実践を振り返ると同時に具体的な指導方法を考えるための機会を提供し得るものであるといえる。

図 3　リーフレットの一部

（5）本研究の成果のまとめ

本研究では，「学習者の自律性や主体的な学びを支える」という学校教育の課題に資する知見を得ることを目指し，教師の自律性支援的な指導行動を習得するための教授プログラムを開発することを目的とした。研究 1 では，自律性支援の効果に関する実証研究の知見を整理した。研究 2 では，教員が有する自律性支援に対する意識を測定する尺度を作成し，その特徴を明らかにした。研究 3 では，授業場面において自律性支援がどのようなかたちでみられるのかを発話のレベルで明らかにした。研究 4 では，研究 1～3 の知見をもとに，教員に自律性支援の概念と研究知見を伝え，それをもとに実践を考えるプログラムを開発した。また，一連の研究知見をまとめた教員向けのリーフレットを作成した。

本研究は，理論的な実証研究を学校教育場面につなぐための橋渡しとなる実践的・応用的な研究としての意義がある。特に，現在の学校教育場面における「学習者の自律性や主体的な学びを支える」という課題に資する研究知見を提供するものであるといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岡田　涼・田口恵也	４．巻 37
２．論文標題 異学年集団における教師の自律性支援	５．発行年 2018年
３．雑誌名 香川大学教育実践総合研究	６．最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡田　涼	４．巻 150
２．論文標題 教師の自律性支援の効果に関するメタ分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 香川大学教育学部研究報告第I部	６．最初と最後の頁 31-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 教師の自律性支援―統制の有効性認知に関する研究―学校種，教職経験年数，教師効力感との関連から―	４．巻 35
２．論文標題 岡田　涼	５．発行年 2017年
３．雑誌名 香川大学教育実践総合研究	６．最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡田　涼	４．巻 149
２．論文標題 教員養成課程の学生における自律性支援―統制の有効性認知に関する研究	５．発行年 2018年
３．雑誌名 香川大学教育学部研究報告	６．最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 岡田　涼
2．発表標題 教師の自律性支援の効果に関するメタ分析
3．学会等名 日本心理学会第82回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 岡田　涼
2．発表標題 異学年集団における教師の自律性支援の変化
3．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4．発表年 2018年

1．発表者名 岡田　涼
2．発表標題 教職志望学生における自律性支援―統制の有効性認知に関する研究
3．学会等名 日本パーソナリティ心理学会第26回大会
4．発表年 2017年

1．発表者名 岡田　涼
2．発表標題 教師の自律性支援―統制の有効性認知に関する研究
3．学会等名 日本心理学会第81回大会
4．発表年 2017年

１．発表者名 岡田　涼
２．発表標題 異学年集団における教師の自律性支援―発話データを用いた分析―
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考